

連合反応により転倒を繰り返していた 慢性期脳卒中患者の動作改善で軽減を示した一例

1) 川西湖山病院 訪問看護ステーション

【キーワード】連合反応, 転倒リスク, 動作改善

【はじめに・目的】本症例は自宅内でのポータブルトイレ移乗時に、麻痺側下肢連合反応により転倒を繰り返していることから介護負担が増加していた。前年より訪問リハビリを開始、デイケアを併用し本人が希望しているポータブルトイレへの移乗自立を目的とした介入を行なう。同法人内におけるセラピスト間での連携を図りながら介入したことで、移乗動作の軽減が図れたことをここに報告する。

【症例紹介】年齢：90歳代男性 診断名：小脳脳幹梗塞後遺症(右片麻痺) 既往歴：慢性肝機能障害 Hope：ポータブルトイレ移乗の自立 家族 Need：動きやすくなって欲しい

【説明と同意】本症例はヘルシンキ宣言に基づき、御本人、御家族へ書面での説明と同意を得た。

【初期評価】Br. Stage(右)：上肢Ⅱ手指Ⅱ下肢Ⅲ 感覚：足底から足部にかけて鈍麻 MMT：体幹筋群3 下肢伸展筋力3 大殿筋3 ROM-T：右膝関節伸展5° 右足関節背屈5° 姿勢：座位姿勢は骨盤右回旋が著明であり右足底が地面へ接地不十分となる。

脊柱も右側弯となっており座位重心は左側方へ偏移している。

立位は後方重心が著明である。

ADL：寝返り自立 起き上がり中等度介助 座位自立 立ち上がり中等度介助 立位保持中等度介助

【問題点】Ⅱ1 移乗時の連合反応による転倒 Ⅱ2 在宅生活での不活発による活動性低下 筋力低下Ⅱ3 介護者の負担増加

【目標設定】STG：ポータブルトイレへ移乗自立 重心移動の拡大
LTG：家族の介護負担軽減

【治療】Rom-ex Ms-ex 座位での重心移動訓練(運動学習) ポータブルトイレへの移乗訓練(運動学習) 起立保持訓練 環境設定

【経過・結果】介入初期は起立時に前方への重心移動が不足しており、後方へ重心を残したまま行う様子があった。また L 字手すりを過度に引き付ける動作も見られ、このことから連合反応を誘発し動作効率性も乏しい。これにより介護負担が増加していた。訓練では座位での前方への重心移動を主眼にし、前方への誘導、声掛けや視線誘導で重心移動から離脱タイミングを運動学習として行う。手すりへの把持は極力行わないよう指導し、手すりへの手掌接地を提示した。移乗訓練では連合反応により多発していた転倒を軽減するべく、両側足底を地面接地したまま摺り足で方向転換を行う訓練を行った。このことから移乗時の転倒リスクは軽減。訓練内容をデイケアリハビリ職員へと共有し、デイ利用時も統一した方法で実施することで運動学習を促した。また都度訪問での状態を報告するなどの連携を行った。転倒は現在のところ見られず、介護者の負担も軽減がみられた。

【考察】自宅内生活での移乗動作は介護負担が軽減し、ポータブルトイレへの移乗も自立。立位保持時間も以前は数分であったが延長が見られ筋出力の増加もあったと考えられる。連合反応の軽減は非麻痺側下肢への過度な荷重が要因と考えられているため、動作を改善することで可能な限り両側への荷重が均等になり、あえてステップ動作を行なわないことを習慣化することで、連合反応の出現が軽減できたと考える。発症から年数を重ねることで麻痺の回復はプラトーを迎えてしまう。このことから連合反応の軽減にだけ着目するのではなく、現在ある環境や能力に合わせた訓練、プログラムが必要なのではないかと考えた。

【まとめ】訪問リハビリでは介護保険点数の兼ね合いから回数など制限が掛かる場合がある。このことから機能回復のタイミングが遅延することも考えられた。今回の症例では、同法人での情報共有や連携をした取り組みを行うことで持続的な効果的介入となり、即時的な能力改善の一端となった。脳梗塞後遺症での介入は様々な要因が関連していくことから周囲との連携を実感できる症例となった。